

化石館だより



コラム

赤坂の町を支えた石灰産業

江戸時代は中山道の宿場町として賑わった赤坂の町ですが、明治に入り東海道線が開通すると中山道を利用する旅人がいなくなり、赤坂の町はかつての賑わいを失っていきました。そのような中で赤坂の町を支え発展させてきたのは金生山から採掘される石灰石でした。

石灰石を砕き高温で熱すると生石灰（石灰）ができます。生石灰は乾燥剤としてお菓子や海苔の袋などに入っていますので手にされた方もあると思います。この生石灰は水と反応することで消石灰に変化します。消石灰は畑に肥料として撒いたり、鶏舎や豚舎の消毒に撒かれたりします。運動場に引く白いラインにも用いられています。また、フノリや糸屑・粘土などを混ぜて練ると漆喰になり、土壁の上塗りなどに用いられます。「石灰」は生石灰を指す言葉ですが、消石灰や石灰岩も含めた広い意味で用いることもあります。



採石場に隣接した生石灰の焼成炉

石灰は漆喰として古くから利用されてきましたが、とても貴重なものであったため、天皇や貴族、寺社などごく一部の人しか利用できませんでした。石灰の利用が一般化してくるのは江戸時代からで、白壁のお城や蔵などが多く造られるようになります。しかし江戸時代でも石灰は漆喰や薬としての利用が中心で、肥料として用いられるようになるのは江戸時代の終わりころからです。

明治に入ると酸性土壌を改良するため石灰の利用が盛んに奨励されるようになりました。また、建築用にセメントが用いられるようになると、セメントの原料として石灰石の需要が伸びてきました。さらに石灰石は鉄鋼の生産にも必要でした。鉄鉱石を溶融して鉄を得るには鉄鉱石に不純物として含まれているシリカやアルミナなどを取り除く必要があります。鉄鉱石に石灰石を混ぜて溶融すると、不純物は石灰石と結びつきスラグと呼ぶ鉱滓になります。しかもスラグは鉄より軽いため鉄と分離して取り除くことが容易になりますし、セメントの原料にすることもできます。このように近代国家建設を目指して産業が盛んになるのに伴い石灰石の需要も増加していったのです。

金生山では江戸時代から石灰窯を築いて石灰の焼成が行われていました。赤坂の石灰窯は安政三年に江州長浜の梶田喜助が伝えたと言われていますが、元禄11年に市橋村に石灰窯が築かれ税を取り立て



上：明治末期の赤坂湊
下：赤坂湊跡に建つ赤坂港会館

ていたという記録がありますし、古い窯は慶長6年から焼き出していると書かれた記録もありますから、江戸時代の初めには既に石灰を焼いていたようです。

明治に入り、何人もが窯を築き失敗を繰り返しながらも石灰製造を試みるようになりました。また同業者が集まって組合も設立されました。そうして、明治の中ごろには産業としての石灰製造が根付いていきました。

赤坂は中山道という街道沿いに発展した町です。しかも町の傍らを通る杭瀬川を利用すると桑名や名古屋まで船で石灰を運ぶことができました。石灰の運搬が始まると、赤坂や市橋には川湊が開かれ積み下ろしのための土場が築かれました。明治40年から大正8年当時の最盛期には、杭瀬川に数百艘の船が行き交い石灰の輸送を行っていたのです。しかし、鉄道が敷設されると船運による輸送は衰退していきました。

東海道線が開通したのは明治22年です。そして、大正8年には大垣駅から美濃赤坂駅までの支線が開通しました。更に昭和3年には西濃鉄道によって線路は美濃赤坂から昼飯と市橋まで伸びました。こうして鉄道を利用した石灰の輸送ができるようになる

と石灰産業はさらに盛んになり、大正から昭和初期にかけて赤坂の石灰産業は東洋一と称されるほどになっていったのです。
(文責：高木洋一)

お知らせ

化石講演会

とき 2月11日(祝)

午後1時30分より

場所 大垣市スイトピアセンター
学習館にて

講師 大路樹生 名古屋大学博物館教授(館長)

演題 ウミユリはどのような生物か？

～ 現生と化石ウミユリの研究から分かってきたこと ～



問い合わせ： 大垣市金生山化石館 電話 (0584) 71-0950 (ファックスも同じ)
Email kasekikan@city.ogaki.lg.jp